

【原 著】

子どもの主体的な身体表現と多様な動きを引き出す
リトミックの保育実践研究（第二報）
—保育施設における4・5歳児学級の事例を中心にして—

小竹 沙織 馬場 訓子 高橋 慧 渡邊 祐三 高橋 敏之

A Study on the Childcare Practices of Rhythmic Music to Draw Out Children's Independent Physical
Expression and Diverse Movements (2nd Report)
—Mainly Including a Case Study of a Class for 4 and 5 Years Old in a Childcare Facility—

KOTAKE Saori, BABA Noriko, TAKAHASHI Kei, WATANABE Yuzo, TAKAHASHI Toshiyuki

2021

岡山大学教師教育開発センター紀要 第11号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.11, March 2021

子どもの主体的な身体表現と多様な動きを引き出す

リトミックの保育実践研究(第二報)

—保育施設における4・5歳児学級の事例を中心に—

小竹 沙織※1 馬場 訓子※2 高橋 慧※3
渡邊 祐三※1※4 高橋 敏之※5

保育におけるリトミックでは、近年、音楽領域に限らない多様な学びの獲得が期待されている。保育施設における4・5歳児学級の事例を中心に考察した結果、「音楽を体感する力」「音楽への興味の高まり」「注意して聴く力」「自分で考えて表現する力」「協調性」「集中力」「即時反応力」「リズム感」「感性」の育ちが確認できた。保育におけるリトミックは、表現教育の一環として採り入れると同時に、体系的・包括的なカリキュラムを構成することが重要である。また、子どもの主体的な身体表現と多様な動きを引き出すためには、保育者自身がリトミックを純粋に楽しむことが必要不可欠であり、そのためには、ある程度の専門的な知識と技術が求められる。例えば、音楽的要素によって変化する音楽の印象を感じ取る感性や、保育におけるリトミックの題材となり得るものを身体表現化することに慣れ、多様で柔軟な動きができるようになっておく必要があるだろう。

キーワード：子ども，身体表現，リトミック，保育実践，4・5歳児学級

- ※1 御南まんまるこども園
- ※2 ぐらしき作陽大学子ども教育学部子ども教育学科
- ※3 作陽短期大学音楽学科幼児教育専攻
- ※4 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生
- ※5 岡山大学大学院教育学研究科

I 問題の所在と研究の必然性

リトミックとは、聴いた音楽に合わせて即興的な身体表現を中心に行う活動のことである。創案当初のリトミックは、音楽教育法の1つであり、楽器の演奏や歌唱の基礎作りとして考案された。一方で、保育におけるリトミックでは、近年、音楽領域に限らない多様な学びの獲得が期待されている。第一報では、1・2・3歳児学級の事例を検証した結果、幼児の姿として、「音楽を注意して聴く」「保育者の動きの模倣をする」「友達と一緒に身体を動かす楽しさや心地良さを感じる」「日常生活の経験を基に身体表現をする」「友達と身体表現を創造することを楽しむ」等が確認できた。また、保育内容「表現」だけではなく、「健康」や「人間関係」に関連する学びが生じていたことが読み取れた。

本論は、研究の第二報として、保育施設における4・5歳児学級の事例を中心

に、子どもの主体的な身体表現と多様な動きを引き出すリトミックの保育実践を考察する。

Ⅱ 4・5歳児学級におけるリトミックの保育実践内容

1 観察対象園と観察の概要

(1) 観察対象園の概要

構造：鉄骨造2階建，敷地面積：3314.21 m²，延床面積：2097.31 m²，所要室：保育室（9室）・乳児室（2室）・給食室・職員室・事務室・保健室・遊戯室・多目的室（1室）・子育て支援センター室（1室）等，利用定員：満3歳以上～就学前の子ども110名（1号認定）・満3歳以上～就学前の子ども90名（2号認定）・満1歳以上～満3歳未満の子ども30名（3号認定）・満1歳未満の子ども10名（3号認定），保育対象年齢：5か月から就学前まで。

(2) 観察対象

〇県P市内の私立Y保育園の4歳児学級37名，5歳児学級32名。

(3) 観察日とカンファレンス日

観察を201X年3月5日，カンファレンスを201X年3月26日に行った。

(4) データの収集方法

保育者から活動のねらいを聞き取りした上で，4・5歳児それぞれのリトミックの活動時間に保育者と子どもの姿や発言等を観察・記録する。後日，保育実践後に記入した保育者の成果・反省や第1著者の感想・考察等を基にカンファレンスを行い，子どもの育ちや保育者が考える子どもの育ってほしい姿，リトミックの活動中に保育者が意図していたこと等を議論した。

(5) 倫理的配慮

筆者らは実践園に対して，①本研究への協力は任意であること，②リトミックの実践で収集したデータは学術研究以外の目的で使用しないこと，を口頭で説明し同意を得た。さらに，園長を通じて保護者に対し，園児の氏名や園名が特定できない形で，学術論文のデータとして使用することの許可を得た。本論のデータ収集を実施した園は，保育実践研究に積極的な私立園であり，園長が保護者に対し，年度当初に子どもの顔写真や発言等を，学術論文を含む研究に使用する許諾を取り合意形成しているので，倫理的配慮には全く問題はない。

2 4歳児学級のリトミックの実践内容

4歳児学級における実践の概要は，表1に示した通りである。設定されたねらいは，「春が訪れたアルプスに住む動物をイメージし，自分で考えたり工夫したりしながら動物になりきって身体表現することを楽しむ」であり，動物になり切る身体表現遊びが行われた。

まず、保育者がアルプスの位置を地球儀で示したりアルプスの写真を提示したりすることによって、子どもがアルプスに対して具体的なイメージを持てるようにされた。また保育者は、アルプスにどのような動物が住んでいると思うかを問い掛け、身体表現の主題である動物が想像できるようにした。次に、保育者の「みんなも動物さん達になって穴の中で寝てみよう」という言葉掛けによって身体表現が始まり、「ウサギ」「クマ」「ヘビ」「リス」「シカ」「トリ」と主題が展開した。最後に、友達と2人組になり、『アルプス一万尺』を行った。『アルプス一万尺』は、友達と向かい合い、両手を繋いで歌いながら身体を動かし、じゃんけんをして勝った子どもは、友達の周りをスキップ、負けたらその場で手拍子、あいこの時は、お互いに腕を組んで回るといったような触れ合う遊びとなっていた。動物の種類に合わせて、子どもの声の調子や大きさが明らかに変わっており、このことから子どもそれぞれがしっかりアルプスの世界観に入り込み、動物になり切ることを楽しんでいたと言える。

子どもが行った動物の身体表現は、これまでのなり切り遊び等の先行体験や、絵本・テレビ・動物園等で見た動物の姿や、友達や保育者の模倣を基に行われたと考えられる。身体表現の主題の展開は、ピアノの音の変化や、保育者の言葉掛けが契機となっていた。例えば、ウサギの身体表現の多くは、跳ねるようなピアノの演奏によって引き出されたものである。前述した動物の種類の中でも特に、「ウサギ」「クマ」「リス」は、ピアノの音が直接的に子どもの動きを誘発していた。保育者の言葉掛けが契機になった場面としては、ヘビの身体表現の際に、ピアノの音だけでは何の動物か想像できない子どもの姿があったが、保育者が「あ、草むらの中から…」と言うと、ヘビを連想し、地面を這いながらクネクネと動き始めた。さらに、保育者が「のどが渇いてきたな～」「あ、あんなところに木の実がある！」等の言葉掛けを行うと、同じ動物の身体表現でも動きが多様化する場面があった。

本実践では、保育者が「ピョンピョン」といった身体表現方法を示す擬音語や、「クマさんだよ」といった表現の主題を示す言葉掛けを行わないようにし、「喉が渇いたから水を飲みに行こう」等のイメージが膨らむヒントとなる言葉掛けが行われていた。また、保育者が先に身体表現を始めることは控え、表現方法が思い付かない子どもの動きを促す際には、保育者が他の子どもの動きを真似ることで、友達が考えた表現に気付けるような配慮がされていた。保育者は、子どもの想像を掻き立て、動物の表現の幅が広がるような援助を行うことが肝要である。

3 5歳児学級のリトミックの実践内容

5歳児学級における実践の概要は、表2に示した通りである。設定されたねらいは、『くるみ割り人形』のお話の世界に親しみ、お菓子の国の精の個性的な音楽（リズム）に興味を持ち、踊りで表現することを楽しむ」であり、『くるみ割り人形』のお菓子の精になり切って踊るリトミックが行われた。これは、2か月前に音楽発表会で行ったオペレッタを経験したことによって、子どもが

自分の役以外の「お菓子の精」の踊りにも興味を示していた実態と関連しており、本実践では、「チョコレートの精」「お茶の精」「ロシアンケーキの精」「金平糖の精」の4つの踊りを全員で一緒に踊るという活動が行われた。

本論で観察した保育実践は、最終的な「踊る」段階のみの活動であったが、その前段階では、時間をかけて『くるみ割り人形』の世界に親しみ、それぞれの「お菓子の精」の踊りを子どもが創り上げ、完成させるという保育の流れがあった。他のリトミックでも、その時限りではなく、連続した活動にしていくことが大切である。また、5歳児学級は、リトミックを通して、色々な音楽に触れること、友達と一緒に音楽を楽しむこと、表現力を豊かにすること等が、達成されるように保育者が援助することが重要である。

「チョコレートの精」の踊りは、3拍子の音楽に合わせて組になって踊る。振り付けは、向かい合って両手を繋ぎ左右に揺れる、手拍子をする、ポーズを決めるといった動きがあった。手を繋ぎ左右に揺れる振りでは、3拍子に合わせて揺れることのできていたペアが、4組中2組見られた。この2組は、膝を曲げ伸ばししながら、左右の足の重心を交互に移動させることでリズムを取っていた。3拍子に合わせて踊るためには、ピアノの音をよく聴く力と、身体の重心を移動させる等してリズムを取る力が必要だと考えられる。

「お茶の精」の踊りは、初めに中国語の「イーアーサン」の掛け声で始め、足をカエルのようにして大きく飛び跳ねたり、太極拳のような振り付けが取り入れられたりした。ジャンプや駆け足、ポーズを決める等シンプルな振り付けが多かったため、比較的どの子どもでも取り組みやすい振り付けだった。「ロシアンケーキの精」の踊りでは、片足立ちになる振り付けや友達と肩を組んで膝を曲げ伸ばししながらリズムを取る振り付け、友達と肩を組み合わせながら足を左右交互に前に伸ばしながら跳ねる振り付けがあった。「金平糖の精」の踊りは、2拍子のリズムの音楽でバレエの動きを取り入れた振り付けであった。片足立ちになる時間が比較的長く、バランスを保つ力が求められる振り付けであった。

本実践では、どのお菓子の精の時も全員で踊る時には、どの子どももスムーズに踊っていたことから、それまでの活動の中で他の「お菓子の精」の踊りに興味を持ち、友達が踊る姿をよく観察していたことが分かる。また、この踊りは、本実践の活動以前に子どもが考えた振り付けであり、音楽を聴き、その音楽の雰囲気やテンポを身体で感じ、「寂しい曲だな」「元気な曲だな」と話し合いをしながらグループで創り上げていった。振り付けの創作は、バレエの『くるみ割り人形』を鑑賞して、「こんな踊りをしてみたい」と刺激を受けた経験が基になっている。子どもが興味を示したものを主題としてリトミックを行うことは、子どもにとって抵抗なく活動に参加しやすくなることに繋がるだろう。

リズムに合わせて踊ることは、子どもにとって難しく、何度も練習が必要である。ただ単に踊りの練習をするのではなく、『くるみ割り人形』の独特な音楽の雰囲気を身体全身で感じ、楽しみながら行えるよう保育者は配慮しなければならない。実際に、「金平糖の精」の踊りでも2拍子という正確なリズムは、子どもに強調して教えず、音楽の雰囲気を感じながら踊れるようにしていた。

Ⅲ リトミックの保育実践による子どもの学び

第一報で考察したように、音楽教育法であったリトミックは、指し示すものが変化してきた経緯がある。特に保育においては、「表現」の要素が大きくなり、音楽・造形・身体・演劇・言語表現の中の音楽と身体が強く結び付いたのがリトミックであると言えよう。今後は、保育におけるリトミックの新しい定義やリトミックによって引き出される学びの要素を考える必要があるだろう。

先行研究の概観から導き出されるリトミックによって身に付く力（学びの要素）として⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾、①音楽を体感する力、②音楽への興味の高まり、③注意して聴く力、④自分で考えて表現する力、⑤協調性、⑥集中力、⑦即時反応力、⑧リズム感、⑨運動神経の向上、⑩感性、が挙げられる。ここでは、①～⑩の項目を視点として本実践を振り返り、リトミックで得られる子どもの学びを検討する。保育実践の評価は、本来、長期的なデータ収集を基に一人一人の子どもの達成度を考察する必要がある。したがって、上記の学びの要素は、現時点では、方向性や可能性について問題提起できるという範囲の事柄であって、決定的な評価の指標や尺度を提供した訳ではない。

1 年齢ごとに見る保育所のリトミックにおける学びの要素

(1) 1・2・3歳児学級

1・2歳児学級では、ピアノの音に合わせた動きを楽しむことに重点が置かれ、「①音楽を体感する力」を育める活動であったと言える。3歳学級になると、友達の動きに関心を持つ子どもが増え、友達と一緒に活動することを楽しむ姿があり、「⑤協調性」が育ち始めていると考えられる。また、ピアノの音楽が変わった場面において、1・2歳児学級では、動きを止めて保育者の方に視線を向けていたが、3歳児学級では、保育者の動きよりもピアノの音に関心を向ける子どもがいたことから、「③注意して聴く力」「④自分で考えて表現する力」「⑦即時反応力」を育める可能性がある。1・2・3歳児学級の大きな特徴は、音楽よりも保育者や友達の動きを模倣する場面が多かったことである。1・2・3歳児学級の子どもの表現活動では、模倣が重要な活動内容であると指摘できる。

(2) 4・5歳児学級

4歳児学級は、保育者の模倣に止まらず、友達と一緒に表現することを楽しみ、友達同士で触れ合いながらリズム遊びを行っていたことから、「⑤協調性」の育ちが明確であった。5歳児学級は、「①音楽を体感する力」「②音楽への興味の高まり」「③注意して聴く力」「④自分で考えて表現する力」「⑤協調性」の全ての力がよく見られたことから、年齢を追うごとにリトミックによって身に付く力が、徐々に定着すると考えられる。

「②音楽への興味の高まり」は、1・2・3歳児学級よりも4・5歳児学級で確認できた姿である。5歳児学級は、『くるみ割り人形』に出てくる「お菓子の精」それぞれの音楽の雰囲気をつかえており、音楽の雰囲気から子どもなりにイメー

ジした振り付けを考えて踊っていた。このことから、音楽に興味を示し、音楽のイメージを子どもなりに理解していることが読み取れる。「③注意して聴く力」に関しては、4・5歳児学級における保育者の言葉掛けは、1・2・3歳児学級よりも抽象的なものであったため、子どもはピアノの音色から何を表現した音楽なのか推測するため、よく耳を傾けようとする姿が見られた。「④自分で考えて表現する力」については、4歳児学級では、動物の大きさや体の動かし方等のイメージがしっかりと定着しているため、自分なりに動物の姿をイメージしながら表現しようとしていた。5歳児学級は、自分で振り付けを考えるという作業を行っていることから、自分で考えて表現する力が身についていると言える。「⑤協調性」については、友達の姿を意識して「友達と一緒にする」ことを非常に楽しんでいて、リトミックは1人で行う活動ではないため、学級全員で同じ1つの活動をするという経験を積み重ねることで、子どもの発達と共に徐々に協調性が身に付いていくと考えられる。

「⑧リズム感」は、踊りを踊るためには必須条件であり、特に5歳児学級では、ピアノの音をよく聴きながら、リズムに合わせて身体を動かそうとする姿が見られた。5歳児学級の「踊りを踊る」という活動は、曲のリズムを全身で感じ取り、足を出す、身体を揺らす、手拍子をする等の動作をその曲のテンポに合わせて行わなければならないため、リズム感を培うことができていると推察できる。「⑩感性」においては、子どもが曲のイメージを「明るい感じがする」

「元気な曲だな」等と自分なりに感じ取っていた事実から根拠付けられる。「⑩感性」の項目において、ここでの「感性」とは、子どもが音を聴き、想像力を働かせながらその音のイメージを感じ取るということを示す。幼児期は、感性の基礎を育てていく大切な時期である。4つの特徴的な音楽を全身で表現していた5歳児学級は、「お菓子の精」の音楽の世界観や雰囲気子どもなりに解釈し、自分達で振り付けを考え、身体で表現しようとしていた。想像力をしっかりと働かせながら音楽のイメージを感じ取っていたことが読み取れる。

(3) 1～5歳児学級

「①音楽を体感する力」については、1～5歳児学級全てが該当した。ピアノの音を、動物や自然物といった子どもにとって身近なものとして例えるため、子どもにとってより音楽を体感しやすいようになっていたと言える。「⑥集中力」は、本実践のリトミックだけでは十分に育ったという断定は難しいが、リトミックをしている時間は、どの年齢の子どもも主題の世界に入り込み、楽しんで活動していた。本実践のような経験を繰り返すことによって、子どもの集中力を育てることが期待できる。

「⑦即時反応力」とは、音やリズムの変化に自分で気づき、素速く反応することである。例えば、「ピアノの音が聞こえたら動く」「ピアノの音が止まったら自分も動きを止める」「ピアノの音楽の速度が速くなったら自分も速く動く」といったようなことである。このような即時反応は、1～4歳児学級まで、どの学級でも見られたが、年齢を重ねるごとにできるようになっていた。「⑨運動

神経の向上」の項目においては、本実践の観察結果のみでは判断ができないため、継続的な保育実践と観察が必要である。

2 リトミックから得られる多様な力

リトミックは、音楽領域における力だけでなく、基礎的な運動能力や集中力を身に付けていくことが可能である。家庭では味わうことのできない活動であると共に、乳児期からのプログラムもあり、年齢ごとに発達過程を考慮した活動を行うため、身体表現活動が苦手な子どもや、先行体験が少ない子どもでも取り組みやすいものである。

リトミックは、身体を動かす楽しさに加え、表現の楽しさを味わえる点が優れている。リトミックの学びの発展としては、集団による創作舞踊に発展していく素地を作るといふようなことも考えられる。集団による創作舞踊に類似した一般的な保育場面としては、運動会や生活発表会の中で、子どもが踊りを観客に見せるといふものがある。リトミックを通して音楽を身体で感じながら表現を楽しむ経験を積むことは、保育施設における日々の遊びや生活から踊りの発表の場への円滑な移行を可能にするであろう。

保育所では、年齢が上がるごとに集団を意識した活動が増えるが、リトミックは、学級全員で活動することが多いため、表現は自由であっても、低年齢の頃から同じ場所で一緒に活動する楽しさを感じられる。そして、一緒に活動する楽しさは、発達過程が進むごとに協調性が身に付くことに繋がると考えられる。さらに、リトミックの活動中や活動後に、互いの自由な表現を認め合う場を設ければ、さらに子どもの協調性を高めていくことができるであろう。

IV 子どもの主体的な身体表現と多様な動きを引き出す保育者の資質能力

第一報の先行研究概観で確認したように、身体表現を伴う活動に対して苦手意識を持つ保育者は少なくない⁽⁴⁾。まずは、自由に表現することに対して抵抗を感じることなく、保育者自身がリトミックを純粹に楽しむことが求められる。保育者がリトミックを楽しめるようになるには、保育におけるリトミックの専門的な知識と技術が重要であると考えられる。そこで、子どもの主体的な身体表現と多様な動きを引き出すための保育者の資質能力について考察する。

1 身体表現能力

子どもが音楽から感じたことや自分のイメージを、即興的で自由に身体表現を行うリトミックにおいても、保育者や周りにいる友達の表現を模倣することから始まる場合が多い。自由な表現ができるようになるまでに、模倣は、非常に大切な学習の段階であると言える。保育者が様々な身体を使った表現を示すことによって、子どもはそれを真似ようとし、様々な動きを体感していくことが予想される。また、それを繰り返す内に、頭の中にある自分のイメージを、自分なりに無理なく自然に身体表現することができるようになると考えられる。

したがって保育者は、保育におけるリトミックの題材となり得るものを身体

表現化することに慣れ、多様で柔軟な動きができるようになっておく必要があるだろう。また、保育者による手本の提示によって、子どもの表現が画一的になるのではなく、表現の多様性や自由性に気付けるようにすることが重要である。具体的には、最初は模倣から始まった身体表現でも、その子独自の表現が加えられた場合はそれを取り上げ、表現形式そのものではなく、その子らしさを褒めて育てることが考えられる。

また、本論における5歳児学級の実践では、バレエの演目である『くるみ割り人形』を主題にリトミックを行った。実践園では、自由な身体表現活動をする前に、保育者がバレエ特有の姿勢や動きを提示し、模倣をする機会が設けられていた。その結果子どもは、普段の生活では行わない多様な動きを経験することができた。バレエの他にも、踊りには様々な種類があり、それぞれに特有の身体の使い方やリズムの取り方がある。踊りの種類とその基礎的な技能を知っておくことは、保育者の身体表現能力の向上に資すると共に、子どもの学びの幅を広げるための重要な要素であろう。

2 音楽表現に関する能力

保育施設における生活では、季節の歌を歌ったり、昼食や組活動の前に手遊びをしたりすることは、日常的に行われている。その際に使われる楽器としては、ピアノが最も一般的であると考えられる。本実践のように、子どもが聴き慣れているピアノを使用したリトミックは、子どもにとって参加しやすく、「楽しそう」というイメージを持ちやすい。保育者は、ピアノの演奏能力が求められると同時に、リトミックに使える楽譜を収集し、練習する努力が大切である。ピアノの演奏能力とは、表現の主題に対するイメージ形成を促したり、子どもの動きを多様化したりする表現力及び即興力のことである。保育者には、調性・速度・音量・アーティキュレーション(articulation)等を変えて演奏する能力や、それらの音楽的要素によって変化する音楽の印象を感じ取る感性や、音楽的要素の違いによって子どもが何を楽しんだり連想したりするかを読み取る子ども理解力が求められる。例えば、本論で提示した5歳児学級の実践では、「寂しい曲」「元気な曲」というように、聴いた音楽の印象を話し合い、振り付けを考えた。このような活動を指導・援助するためには、保育で扱う曲のどの部分に対して、子どもが関心を持って楽しむかを予測し、教材開発を行う必要がある。

以上の考察から、リトミックの指導ができる保育者の養成や研修の在り方は、大きな課題であると言えよう。保育者養成校の学生は、音楽に関する能力の個人差が大きいことが予測され、楽譜が読めない段階から学習を始める学生がいる一方で、耳で聴いたことのあるメロディを即興で再現できる状態の学生もいる。個人差が大きく、限られた授業時間で、リトミックの指導に必要な能力を獲得させることは、非常に困難である。保育における音楽の専門的知識や技能は何かということや、その教育課程の整備には、議論の余地があると指摘できるであろう。

3 教材開発能力と子どものイメージを豊かにする指導・援助

子どもの身体表現は、子どもが何を楽しみ、どのような経験を記憶して身体表現に生かすのかを読み取り、子どもの多様な動きを引き出す題材を見付ける必要がある。本論の事例にあるように、まずは、親しみのある動物になる（なり切る）ことが、子どもにとって抵抗感のない楽しいリトミックになるだろう。次の段階の題材では、風・雲・雨・氷等の自然事象が考えられる。最後に目指す活動としては、「喜び」「悲しみ」「楽しさ」「驚き」等の抽象的な感情表現が想定できる。自分が動物になったり、風や雲や氷になったり「できる」感覚は、子どもにとって新鮮であると同時に、驚きであろう。「これは面白い」と思えるような実感や体験をどのように保育場面で設定していくかが重要である。

保育におけるリトミックは、イメージの身体的表出（具現化）という回路を頭脳に形成し、強化していく学習と言える。保育の展開としては、まず、主題に対するイメージ形成を十分に行う必要がある。例えば、身体表現が楽しめる先行体験をしたり、踊りの発祥の地の雰囲気や、踊りに使われる音楽の特徴を十分に味わったりすることが挙げられる。次に、子どもがイメージを具現化する契機となるような言葉掛けをすることが求められる。言葉掛けは、これまで考察してきた通り、子どもの姿に合わせて、臨機応変に行うことが重要である。

V 今後の展望

『幼稚園教育要領』（2017）では、「動き」という用語が4箇所を確認できる。その内の2箇所は、保育内容「表現」の「内容」に示された「感じたこと、考えたことなどを音や**動き**などで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする」「自分のイメージを**動き**や言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」⁽⁵⁾（下線と太字は、筆者らによる）である。現代保育において、身体表現は子どもの重要な表現手段であり、リトミック及び類似の活動の実践は、様々な形態として確認できる。しかし、その位置付けは、保育施設によって異なり不明確である。本研究の第一報の3歳児学級の実践例からも分かるように、1歳児学級の時からリトミックを経験してきた子どもの表情は、非常に生き生きとしており、音楽に合わせて身体で表現することを心の底から楽しんでいることを示していた。保育実践における経験の蓄積は重要であり、1歳児学級からリトミックに親しみ、楽しさを伝えることが求められる。つまり、表現の芽生えを育むことを目標にして、1歳児学級から5歳児学級へ向けて、体系的・系統的な指導計画と保育計画を立てて行く必要がある。

また、リトミックには、音楽と身体の一体性があり、音楽の雰囲気を身体で即興的に表現することが基本である。そのため、子ども（学習者）と保育者（指導者）との間に、即興演奏—即興身体表現の関係性が成立しないとリトミックにならない。したがって保育者には、子どもの動きに合わせて演奏を工夫する能力が求められる。リトミックの指導ができる保育者の養成は大きな課題であり、今後は、保育施設におけるリトミックの専門的な知識や技能とは何かを明らかにすると同時に、保育者がそれらを身に付けられるようにする必要がある。

表 1. 保育施設における 4 歳児学級のリトミックの実践事例


観察日時	201X年3月5日 10:00~10:20	
対象・指導	4歳児学級／男児18名・女児19名, 指導者 H.M.	
ねらい	春が訪れたアルプスに住む動物をイメージし, 自分で考えたり工夫したりしながら動物になりきって身体表現することを楽しむ。	
子どもの動きと言葉	保育者の動きと言葉	音楽と子どもの様子
<p>○保育者の話を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アルプスの情景やそこに住む動物の姿を想像する。 <p>○動物になりきって穴の中で眠る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きな動物になって床に寝転ぶ。 <p>○ウサギになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立ったまま手を頭の上に耳のようにしてジャンプしたりしゃがんだまま飛び跳ねたりする。 <p>○クマになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すぐにクマのように歩き始めたり, 「クマだ」と言ったりしている。 <p>○ヘビになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めはピアノの音を聴いても分からず, 保育者の方を見たり, 動きを止めたりしている。 ・ヘビと分かると「ニョロニョロ」と言ったり床に這いながらくねくねと体を動かしたりする。 <p>○リスになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽が始まるとすぐに両手をグーにして胸の前に揃えリスのように小走りで動く。 ・保育者の真似をして食べ物を食べる動きをする。 <p>○シカになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者や友達の前を真似をして一本指を立て頭の上に乗せ, それをシカの角に見立てて走ったりスキップをしたりする。 <p>○トリになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者の言葉かけをヒントにすぐにトリの音楽だと気づき, 「あ, トリだ!」と言ったり, 手を羽のようにして羽ばたかせる動きをしたりする。 <p>○羽を休めて休憩する。</p> <p>○今までの動物になりきり, 『アルプス一万尺』をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アルプスの写真を見せ, 雪がたくさん降り積もり, とても寒い場所であることを説明する。 ・温かい春が来ることを楽しみに待っている動物たちが暮らしていることを伝えると共にどんな動物が住んでいるか子どもに尋ねる。 ・「トリさんはどうやって眠るかな?」「羽を後ろにたたんでいるね」など声を掛ける。 ・子どもの表現を待ち, 子どもがしているウサギの動きを真似する。 ・「あ!誰?」と声を掛け, 子どもが動き始めるのを待つ。 ・色々なクマの表現ができるように「喉が渴いたから水を飲みに行こう」と声を掛ける。 ・何の動物かイメージしにくい子どもがイメージしやすいよう「草むらの中から何か出てきたよ」と声を掛ける。その後子どもが動き始めたと同時にヘビの動きを始める。 ・子どもが表現をし始めるのを待ち, 始めた表現と同じように動く。 ・「ごはんを探しに行こう」と言い, 木の実を食べるような動きを取り入れる。 ・子どもが表現し始めるのを待ち, なかなかシカの動きが見られなかった為, 見本となってシカの真似をする。 ・子どもがトリの音楽だと気づき, 表現のイメージがしやすいように「空の上に…」と声を掛ける。 ・「あんな所に木の実があるよ」と声を掛け, 木の実を食べる動きをする。 <p>・子どもとペアになり一緒に『アルプス一万尺』をする。</p>	 <p>♪ウサギ</p> <p>♪クマ</p> <p>♪ヘビ</p>  <p>♪リス</p>  <p>♪シカ</p>  <p>♪トリ</p> <p>♪『アルプス一万尺』</p> 

表2. 保育施設における5歳児学級のリトミックの実践事例

観察日時	201X年3月5日 10:25~10:40
対象・指導	5歳児学級/男児7名・女児26名, 指導者 H.M.
ねらい	『くるみ割り人形』のお話の世界に親しみ, お菓子の国の精の個性的な音楽(リズム)に興味を持ち, 踊りで表現することを楽しむ。
子どもの動きと踊りの振り付け	音楽と子どもが踊る様子
<p>○保育者の話を聞く。</p> <p>○「チョコレートの精」の子どもが前に出て踊る。 (他の子どもは, その姿を見る。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3拍子のリズムで踊る。 ・ペアになり両手を繋ぎ音楽に合わせて左右に揺れる。 ・リズムに合わせて手拍子をする。 ・ポーズを決める。 <p>○全員で「チョコレートの精」の踊りをする。</p> <p>○「お茶の精」の子どもが前に出て踊る。 (他の子どもは, その姿を見る。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カエルのように足を高く曲げながら手を腰にして高くジャンプする。 ・手は人差し指を立て上下に素早く動かし, 足はその場で駆け足をする。 ・太極拳のようなポーズをする。 ・最後にポーズをする。 <p>○全員で「お茶の精」の踊りをする。</p> <p>○「ロシアンケーキの精」の子どもが前に出て踊る。(他の子どもは, その姿を見る。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・片足を浮かせたまま前に出したり後ろに出したりし, リズムに合わせて「ヘイ！」の掛け声と共にもう片方の足でバランスをとる。 ・リズムに合わせて回りながら手拍子をする。 ・2人組もしくは3人組で肩を組み, リズムに合わせて膝を曲げ伸ばしする。 ・肩を組んだままチアリーディングのように交互に左右の足を前に出す。 ・最後にポーズをする。 <p>○全員で「ロシアンケーキの精」の踊りをする。</p> <p>○「金平糖の精」の子どもが前に出て踊る。 (他の子どもは, その姿を見る。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2拍子のリズムに合わせて様々なバレエの動きを取り入れた振りをする。 ・最後にポーズをする。 <p>○全員で「金平糖の精」の踊りをする。</p> <p>○振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「楽しかった」「面白かった」等の感想を発表する。 	<p>♪「チョコレートの精」</p>  <p>♪「お茶の精」</p>  <p>♪「ロシアンケーキの精」</p>  <p>♪「金平糖の精」</p> 

参考・引用文献

- (1) リトミック研究センター, <https://www.eurhythmics.or.jp/whats/> (2020年12月8日閲覧)
- (2) 二見美千代:「リトミックの指導法に関する一考察—乳幼児と母親たちのリトミックグループの分析—」,『千葉敬愛短期大学紀要』第40号, 313-325頁, 2018.
- (3) 今井暁式・吉村夕里・堀内詩子:「幼児の音楽発達とリトミックに関する一考察—楽曲分析と事例検討をとおして—」,『臨床心理学部研究報告』第3集, 17-30頁, 2010.
- (4) 遠藤晶:「幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について—身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して—」,『武庫川女子大紀要』第54巻, 96頁, 2006.
- (5) 文部科学省:『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本』, チャイルド本社, 21頁, 2017.

A Study on the Childcare Practices of Rhythmic Music to Draw Out Children's Independent Physical Expression and Diverse Movements (2nd Report)—Mainly Including a Case Study of a Class for 4 and 5 Years Old in a Childcare Facility—

KOTAKE Saori*1, BABA Noriko *2, TAKAHASHI Kei *3, WATANABE Yuzo *1*4, TAKAHASHI Toshiyuki*5

In recent years, rhythmic in childcare has been expected to acquire a variety of learning not limited to the music field. As a result of the discussion mainly including a case study of a class for 4 and 5 years old in a childcare facility, we were able to confirm the development of "ability to experience music," "enhanced interest in music," "ability to listen carefully," "ability to think and express by themselves," "cooperativeness," "concentration," "immediate reaction," "sense of rhythm," and "sensitivity". It is important to adopt rhythmic music in childcare as a part of expressive education, and at the same time, to structure a systematic and comprehensive curriculum. In addition, it is essential for caregivers to truly enjoy rhythmic music in order to bring out children's independent physical expression and diverse movements, which requires a certain degree of specialized knowledge and skills. For example, they will need to be sensitive to the impressions of music as it changes according to musical elements, be familiar with the physical expression of potential rhythmic subjects in childcare, and be able to move in a variety of flexible ways.

Keywords : children, physical expression, rhythmic, childcare practice, class for 4 and 5 years old

*1 Minan Manmaru childcare center

*2 The Department of Childhood Education, The Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo University

*3 The Major of Child Education, The Department of Music, Sakuyo Junior College of Music

*4 The Joint Graduate School (Ph.D. Program) in Science of School Education Hyogo University of Teacher Education

*5 Graduate School of Education, Okayama University
